

証券外務員一種・二種合格

合言葉de合格！法

第7編 財務諸表と企業分析

Success3

サクセスキューブ株式会社

外務員資格試験取得を応援するオリジナルの手づくりサブノートと問題集について

このオリジナルサブノートと問題集は、最近たくさんの方が馴染みのあるブログ記事・コメント風に（また、ビジネススクールの講義会話風に）作成したものです。（従来の参考書等とは異なるスタイルです。）

まずは外務員資格試験に合格していただくことを最大の使命として誕生しました。

当社のオリジナルサブノートと問題集は、外務員一種試験を受験し最初不合格そして二回目の受験で合格となった個人的体験から出題傾向や試験問題パターンを分析した上で傾向と対策としてオリジナルサブノートと問題集をとりまとめたものです。

よって、「出題頻度が高い」と予想できるといった内容の記述であっても、それは一外務員種試験の不合格・合格体験から注意喚起の意味で記載するものであり、絶対に出題されると断定するものではありません。

あくまでも試験範囲の学習におかれまして一つの目安にいただければと思います。

金融商品取引法には

「・・・有価証券の発行及び金融商品等の取引を公正にし、有価証券の流通を円滑にするほか、資本市場の機能の十全な発揮による金融商品取引等の公正な価格形成等を図り、もって国民経済の健全な発展及び投資者の保護に資することを目的とする。」とあります。

当然に金融商品取引業者等とその金融商品取引業者等に勤務する外務員は、金融商品取引法の目的のために重要な役割を果たす必要があり、投資家保護という観点のみならず、資本市場に対して相当な責任を負っていることになります。

外務員資格取得を目指して試験にチャレンジする皆さんは、決して外務員試験合格がゴールではありません。

合格後も、いろんな制度の情報収集や新たに開発される商品についての知識向上、あるいは経済情勢の判断など、不断の努力がより一層求められることは間違いありません。

当社のオリジナルサブノートと問題集は、二種外務員試験・一種外務員試験の受験生に対して、可能な限り短期間での合格を目指すためにポイントを絞り込んで、『合言葉』というキーワードとイメージを活用しながら、取り組んでいただくことを最大の狙いとしています。

（なぜなら、受験生によっては仕事や人生の経験から馴染みのない難解な言葉・概念や、そこから用意される問題等の理解・記憶において皮膚感覚でその困難性を感じておられる方もいらっしゃるからです。）

つきましては、「外務員試験合格で良し」とすることなく、とりわけ実際の試験の時に間違ったと認識できる範囲の問題や自分なりに不十分だと認識できる分野・概念等々を合格後も追加の学習や不断の努力によって、より高い水準へと知識・スキルを高めていかれることをお勧めいたします。

当社といたしましては、一人でもたくさんの方が外務員資格試験に合格されることで仕事遂行面での貢献やさらなる人生の展開、あるいは就職活動や派遣登録等におかれましてより選択肢が増えることにつながればこれ以上の喜びはございません。

※ なお、オリジナルの手づくりサブノートと問題集は（実際の試験・出題傾向等に際しまして）日本証券業協会さまとは一切関係がございません。

※ あくまでも当社が独自の観点から出題傾向とポイントを分析した上で、記載内容を吟味して作成したものです。資格試験の学習及び試験本番に臨まれる時にはその旨十分にご了承ください。

いずれにしてもこのオリジナルサブノートと問題集の記載内容につきましての全責任は当社にあります。万が一、記載内容そのものの誤謬や記載につきましての不備等が存在した場合の全責任も当社に帰属するものです。

【 目 次 】

I	財務諸表の基礎知識	3
	【 貸借対照表（BS）と損益計算書（PL）とは？ 】	3
	【 貸借対照表（バランスシート） 】	5
	【 貸借対照表の特徴（作り方） 】	7
	【 損益計算書の特徴（作り方） 】	14
	【 損益計算書 】	17
	【 損益計算書の出題パターン 】	20
II	企業分析（計算問題）	22
	【 企業分析のお約束ごと 】	23
	【 収益性の分析 】	25
	【 安全性（流動性）の分析 】	28
	【 効率性の分析 】	31
	【 成長性の分析 】	34
	【 企業分析のまとめ（便利な覚え方） 】	36
III	キャッシュフロー分析と損益分岐点分析	37
	【 キャッシュフロー分析 】	37
	【 損益分岐点分析 】	38
	【 損益分岐点分析の計算問題 】	41
IV	配当率と配当性向	42
	【 配当率と配当性向 】	42
V	財務諸表と企業分析の最後	43
	【 連結財務諸表と親会社・子会社 】	43

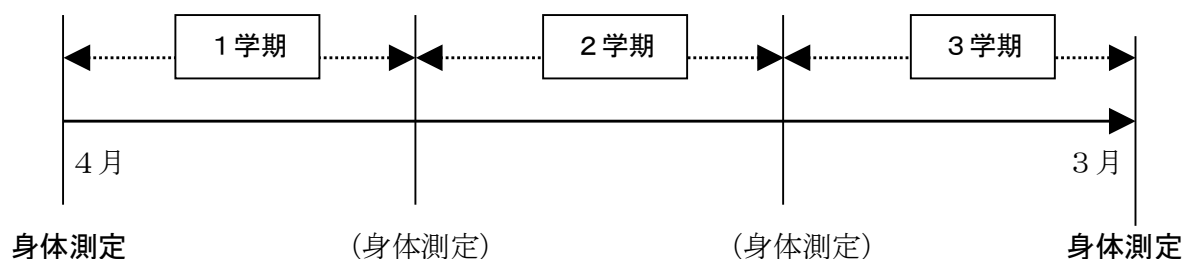
I 財務諸表の基礎知識

銀行等で融資業務（与信判断）を経験されている方には、馴染みの単語ばかりとなりますが、簿記を含めて未経験の方にとっては、手ごわい範囲となります。

可能な限りやさしく解説したつもりです。

思考が拒否反応を示す時は、合言葉で丸暗記してください。

【 貸借対照表（BS）と損益計算書（PL）とは？ 】



- ※ 小中学校時代を思い出してください。
4月から翌年3月までの一学年のサイクルです。

一学期間の成績が、期末に通知表ということで評価されていましたね。
そして、年間のある日に（ある一瞬）、身体測定をしていました。

- ※ これと同じように、企業の一定期間（通常は一年間）の成績に当てはめたもの（通知表と身体測定結果）を財務諸表といいます。

財務諸表		
1学期・2学期・3学期 それぞれの（一定期間の） 通知表に該当するもの。 それが・・・	ある日の （一定時点の） 身体測定に該当するもの。 それが・・・	
損益計算書（PL）	貸借対照表（BS）	キャッシュフロー計算書 CF
※ ピーエルと呼びますがこれは覚えなくて可。 ※ 一定期間の経営成績。 ※ 計算問題あり。	※ ビーエスと呼びます。（バランスシート） ※ 一定時点の企業の財政状態。 ※ 計算問題あり。	※ 一定期間のキャッシュの動きを表したもの。 「ふーん、そうなんだ」でOKです。

損益計算書（PL）	貸借対照表（BS）	キャッシュフロー計算書
※ 企業の経営成績表 ＝一定期間にどれだけ 儲かったか？を示す。	※ ある時点の財産の状況や 借金の状況を示すもの。	
この2つが特に重要です。 表示された数値を、足したり・引いたり 掛けたり・割ったりして分析します。		

ここまで、いいですか。
何となくイメージできましたか？

※ キャッシュフローのキャッシュとは？

「キャッシュ」というくらいですから、現金、または現金と同じようなもの（現金同等物）をいいます。

すぐに現金に換えることのできるものです。

銀行の普通預金や郵貯銀行の貯金などは、カードでもすぐに引き出せます。

・・・現金とみなします。

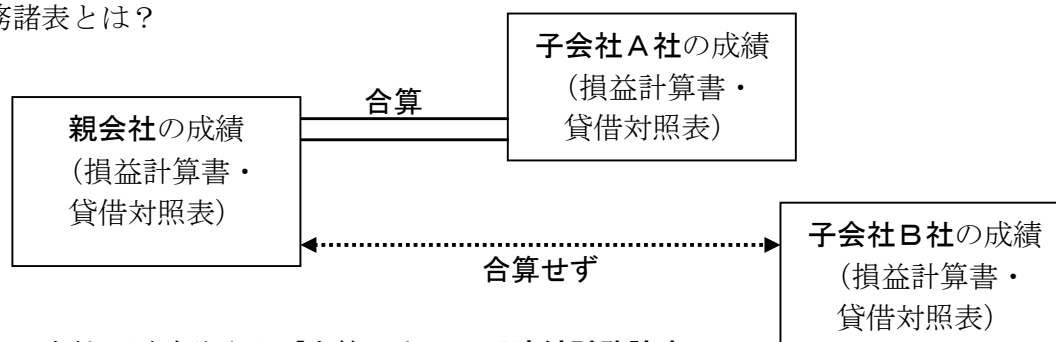
※ 注意（試験に出る可能性もあります。）

株式・・・すぐに換金できませんね。また、タイミングによっては価格が大きく変動します。

なので、株式は（価格変動リスクが高いので）現金同等物には、入りません。

株式は、現金同等物である。○か×か？・・・「×」

※ 連結財務諸表とは？



親会社と子会社の財務諸表を「合算」するのが**連結財務諸表**。

※ 必ずしもすべての子会社を合算する必要はない（例外規定あり）。

【 貸借対照表（バランスシート） 】

※ 一定時点の企業の財政状態を示したものです。（身体測定に例えたもの）
このまま覚えてくださいませ、お代官様、です。

基本的なスタイルは、左と右の表形式です。
そして、左と右の合計金額は必ず一致します。

左＝ 資産 ＝お金またはお金の使い途	右＝ 負債 ＝お金の出所（借金や出資）
この左と	この右とは、合計が必ず一致する。

※ 具体的に（小さなサンプルで）やってみます。

あなたは 1,000 万円準備して会社をつくりました。1,000 万円は銀行に預けています。



お金の使い途（資金の運用状況）	お金の出所（資金の調達）
（銀行預金） 1,000 万円	（あなたからの出資金） 1,000 万円

次に、1,000 万円の中から 500 万円で小さなお店を（土地付き）を買いました。



お金の使い途（資金の運用状況）	お金の出所（資金の調達状況）
（銀行預金） 500 万円（1,000－500）	（あなたからの出資金） 1,000 万円
（土地・建物） 500 万円	
-----	-----
（合計） 1,000 万円	（合計） 1,000 万円

次に、銀行から 2,000 万円借りて、800 万円で商品を仕入れました。
残りの 1,200 万円は、とりあえず銀行に預金しておきました。



さあ、どう変化すると思いますか？



お金の使い途（資金の運用状況）	お金の出所（資金の調達状況）
(銀行預金) 1,700 万円 (500+1,200)	(銀行からの借入金) 2,000 万円
(商品) 800 万円	(あなたからの出資金) 1,000 万円
(土地・建物) 500 万円	
-----	-----
(合計) 3,000 万円	(合計) 3,000 万円

- ※ どうですか？
左と右が一致していますネ。

こんな感じでずっと記録しておいて、ある一定時点の状態をすぐに見ることができるようにしたものが「**貸借対照表**」です。

「あー、今、銀行からの借金がいくらあって、預金はいくら、商品がいくら・・・」
という具合に、すぐに「その企業の財政状態」が分かるものとなっています。

- ※ 貸借対照表、何となくイメージできましたか。
左と右でバランスがとれている(一致している)ので、ピンときますよね。

【 貸借対照表の特徴（つくり方） 】

- ※ そもそも企業会計（企業の成績表をつくる時）においては、ワンイヤー・ルールというもの（＝1年基準）があります。

ワンイヤー・・・一年ということです。

一年を区切りとして、**短期**か、**長期**か、と区別します。

（厳密には一年を超える資産もありますが単純に考えてください。）

また、**流動**的なもの（一年以内に決着のつくもの）、**固定**的なもの（決着まで一年を超えるもの）という区別の仕方もあります。

- ※ ぜひこのまま覚えてください。

お金の使い方（資金の運用状況）	お金の出所（資金の調達状況）
現金、または一年以内に現金に換わるもの。 ＝ 流動資産	一年以内に返すお金。 ＝ 流動負債
何年も使うもの。 ＝ 固定資産	何年かにわたって返すお金。 ＝ 固定負債
支払の済んだ費用だけど何年かにわたって恩恵にあずかれるので資産とみなすもの。＝ 繰延資産	返さなくてもいいお金。 ＝ 自己資本（純資産）
資産合計（ 総資産 ）	負債と資本

この部分を、「純資産」というのは？

- ※ 左と右の合計が（必ず）一緒ですから、下の式が成り立ちます。

$$（左の）総資産 - （右の）流動負債 - （右の）固定負債 = 純資産$$

ということで、**純資産**と呼ばれています。要は、返さなくてもいいお金です。

さあ、ちょっと大変かも知れませんが、貸借対照表のサンプルを次ページに示してあります。ゴシック体のところは、そのまま丸暗記してください。

- ※ 試験の時は、書けなくても構いません。

流動資産に入るのか、固定資産に入るのか、のレベルで判断できればOKですから。

(連結) 貸借対照表

資産	負債・資本
流動資産 (・・・1年以内に現金化される資産) (当座資産) 現金・預金 売掛金 たな卸資産 製品・商品 半製品 仕掛品・貯蔵品 その他の流動資産 短期前払費用・・・「短期」です	流動負債 (・・・1年以内に支払わないといけないもの) 支払手形 買掛金 短期借入金 その他流動負債
固定資産 (・・・長期にわたって使用される資産) (有形固定資産) 建物・構築物 機械・装置 車両・運搬具 器具・備品 土地 (無形固定資産) のれん 特許権・借地権・商標権・漁業権 (投資その他の資産) 投資有価証券 関係会社株式・社債 長期貸付金 長期前払費用・・・「長期」です	固定負債 (・・・支払いが1年以上に及ぶもの) 長期借入金 退職給付引当金 その他固定負債
繰延資産 社債発行費・創立費・開業費	資本(＝純資産) (・・・返さなくても良いお金) 資本金 法定準備金 資本準備金 利益準備金 剰余金 任意積立金 当期未処分利益
資産の部・合計(総資産)	資本・負債の部・合計(負債・資本合計)

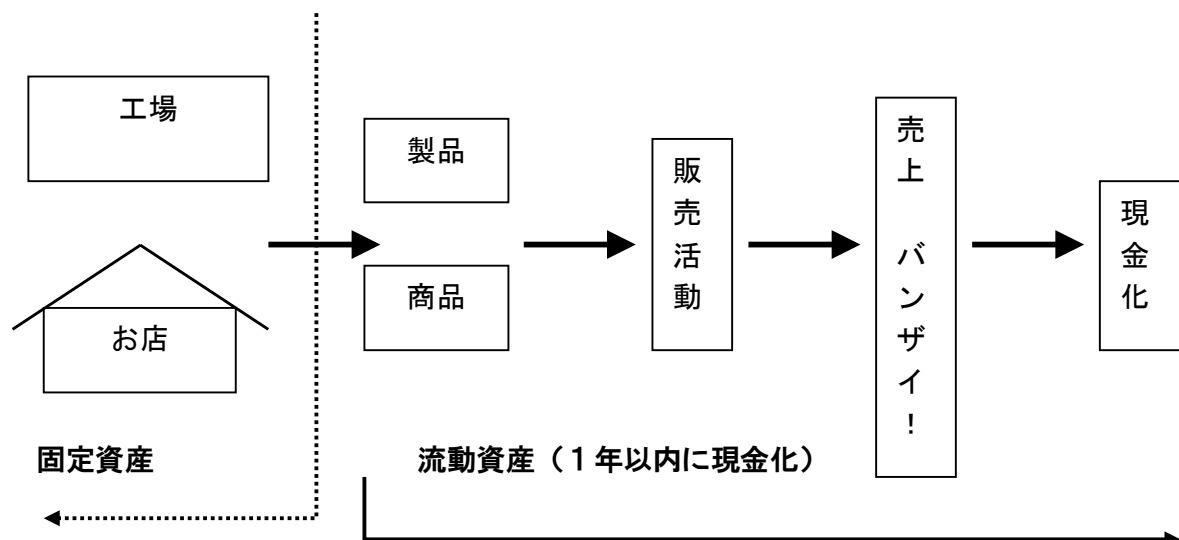
(連結) 貸借対照表 (説明・まずは左側です。)

資産	
流動資産 (・・・1年以内に現金化される資産) 当座資産 現金・預金 売掛金 (相手に「つけ」で販売したものです) ※ ここまでを流動資産の中でも 当座資産といいます。覚えておく。 ※ あらためて販売しなくてもすぐに 現金化できるものということです。 たな卸資産 製品・商品 半製品 仕掛品・貯蔵品 ※ 完成した製品や商品 まだ完成していない途中の製品 つくるための材料等々が 「たな卸資産」に入る。 ※ 材料 ⇒ 半製品 ⇒ 完成品 工場でものを作る会社だと製品 他の会社からものを仕入れて、それ を販売するなら商品、です。 ※ こういった「製品・商品」の 販売活動を通して、無事に売上、と なります。 販売代金が、現金でもらえたり、 銀行振込で預金に入ってきたり、 あるいは、「つけ＝売掛金」と なったりするのです。 いずれ、その「つけ」は、現金化 されることになります。	※ 厳密には、1年を超えるものもあり ますが、簡略化のために1年と認識 しておいてください。

資産	
その他の流動資産 短期前払費用・・・「短期」です （短期的に）前もって支払っておく費用です。 いずれは、商品に加算されて（コストとして）販売・売上、となれば回収されることになるものです。 ※ 短期と長期、の二種類あるということを覚えておいてください。 （１年基準で分ける形です。） ※ 試験問題で、「短期前払費用は、固定資産である。○か×か」と出たら「×」ですね。流動資産ですから。 ※（繰り返します） 流動資産とは、現金、または一年以内に現金に換わるもの。 それが、流動資産。	

ここまで、大丈夫ですか。
次は、固定資産です。

固定資産とは、１年以上にわたって使用していくものです。
この固定資産を使って、製品や商品を製造したり販売したりして、最後は現金化していくという性格のものです。



(連結) 貸借対照表 (説明)

資産	
固定資産 (・・・長期にわたって使用される資産です。) (有形固定資産)・・・実体あり。 建物・構築物 機械・装置 車両・運搬具 器具・備品 土地 (無形固定資産)・・・実体なし。 ※ 要は、法律上の(事実上の)権利と いうものです。 のれん・・・このまま覚える。 → 特許権・借地権・商標権・漁業権 (投資その他の資産) 投資有価証券 関係会社株式・社債 長期貸付金 長期前払費用・・・「長期」です ※ 前払費用には、短期と長期がある ということに注意です。	※ 職人さんの世界で「のれん分け」 というのがありますが、会計上の 「のれん」は、少し意味が異なって きます。 目に見えない資産ということです。 ある会社の財産を全て評価して、 その会社を買収するとします。 その時に、時価評価の純資産から 買収金額を引いたものが「のれん」 だと考えてください。 (ある企業の) 「時価評価純資産価額」－「買収価額」 ＝「のれん」
繰延資産 社債発行費・創立費・開業費 ※ 支払の済んだ費用だけど何年かに わたって恩恵にあずかれるので 資産とみなすもの。＝ 繰延資産	

次は、右側（負債・資本の部）の説明です。

（連結）貸借対照表（説明・右側）

	負債・資本
	流動負債
	（・・・１年以内に支払わないといけないもの）
	支払手形 買掛金 短期借入金
	その他流動負債
	※ 要は１年以内に支払わないといけない負債（借金）です。
	※ １年以内・・・流動か固定かだと流動。
	・・・短期か長期で分けると短期。
	固定負債
	（・・・支払いが１年以上に及ぶもの）
	長期借入金 退職給付引当金
	※ 引当金とは、将来に備えての準備のための費用と考えてください。
	将来、退職者が出た場合に備えて準備しておく退職金と考えたら理解しやすいと思います。
	※ この「退職給付引当金」という単語が「固定負債」に入る、ということは確実に覚えておいてください。
	その他固定負債

	負債・資本
	資本（＝純資産） （・・・返さなくても良いお金） 資本金 法定準備金 資本準備金 利益準備金 ※ ここでは、法定準備金というものの 中に 資本準備金と利益準備金 というのが ある、ということだけで結構です。 剰余金 任意積立金 当期未処分利益

以上で、貸借対照表についての説明は終了です。
お疲れ様でした。

次は、損益計算書についてです。
いわゆる成績表のことでしたネ。

【 損益計算書の特徴（つくり方） 】

貸借対照表のところで、あなたが 1,000 万円出資して会社を立ち上げて・・・という小さなサンプルを勉強しました。

同じことを損益計算書でもやってみます。

（あなたが 1,000 万円準備して会社をつくって・・・の続きだとします。）

お金の使い途（資金の運用状況）	お金の出所（資金の調達状況）
（銀行預金） 1,700 万円（500+1,200）	（銀行からの借入金） 2,000 万円
（商品） 800 万円	（あなたからの出資金） 1,000 万円
（土地・建物） 500 万円	
-----	-----
（合計） 3,000 万円	（合計） 3,000 万円

この表は確認しましたネ。

この続きということにします。

あなたは、社員 1 人の給与を（年間）250 万円支払って営業活動をさせました。

営業マンが働いた時のガソリン代が全部で 7 万円

コピー費用その他の経費が 2 万円

あなたの出張旅費が 8 万円

会社の電気代・ガス代が 13 万円

銀行からの借入金の利息が 50 万円でした。

（自分の給料は 300 万円です。）

一年間、頑張った結果、800 万円分仕入れた商品が、700 万円分売れました。

（在庫の残りは 100 万円ですネ）

700 万円分の仕入れた商品に、**儲け部分を 750 万円のせて販売**することができたので、売上は、1,450 万円の売上でした。

さあ、これから貸借対照表がどんな風に変化するか、そして損益計算書がどんな感じで作成できるかを見ていきます。

（あくまでも小さなサンプルです。） 理解のためには、この小サンプルが大事なのです。



費用（支払い）	売上（入り）
（仕入商品代） 700 万円 ※売上に対する商品代 （800 万円分の中の仕入分 700 万円） この代金はすでに支払っているので 新しい費用は下記の 7 項目になります。	売上 1,450 万円 （※ 全部現金で入ってきたものとする） （※ 商品販売だけの儲けは 1,450 万円－700 万円＝750 万円）
（自分の給与） 300 万円 （社員 1 人分の給与） 250 万円 （ガソリン代） 7 万円 （コピー代） 2 万円 （出張旅費） 8 万円 （電気代・ガス代） 13 万円	
（借入金の利息） 50 万円	
（費用合計） 630 万円	（合計） 1,450 万円
（最終的な儲け＝利益） 120 万円 ＝ 売上 1,450 万円－すべての費用 ＝ 1,450－商品の仕入れ代 700 万円 ＝ 給与その他 630 万円 ＝ 120 万円	次の一年のための資金（自己資本） となります。 ・・・返さなくて良いお金。 ※ 貸借対照表の右下に加算されます。

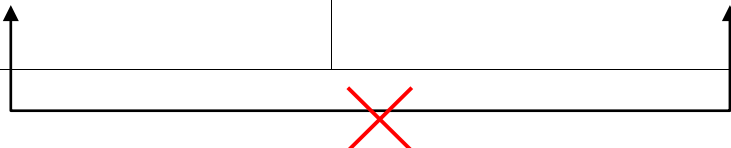
→ 今回ここでは、税金については考慮していません。

※ 普通は、最終的な儲け（利益）から税金を引いたものが残ります。
それが、次の一年のための資金となるのです。

では、この時に、例の貸借対照表はどうなると思いますか？



お金の使い途（資金の運用状況）	お金の出所（資金の調達状況）
(銀行預金) 1,700 万円 + 売上代金 (1,450 万円) - 費用合計 (630 万円) = 2,520 万円 (商品) 100 万円 (800-700) ※ 700 万円分は売れました。 (土地・建物) 500 万円 ----- (合計) 3,120 万円	(銀行からの借入金) 2,000 万円 (あなたからの出資金) 1,000 万円 ----- (合計) 3,000 万円



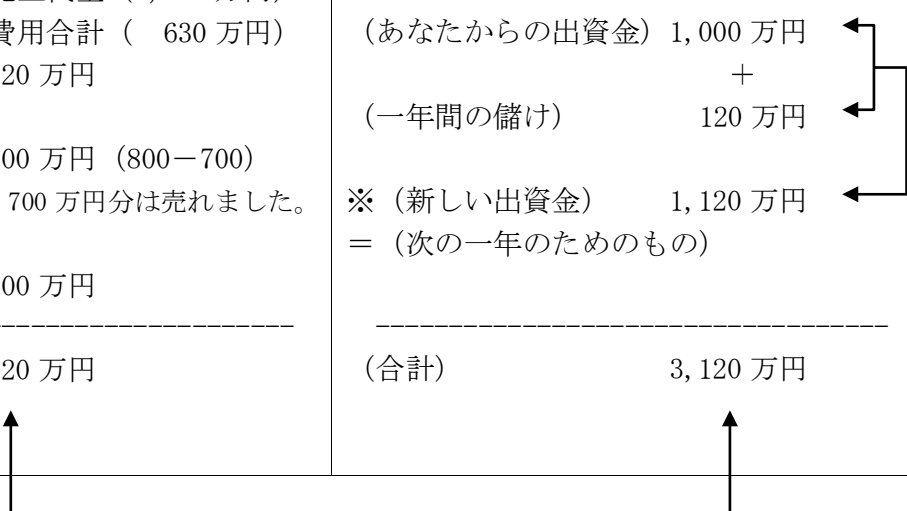
※ 一緒になるはずなのに、120 万円違っています。なぜでしょう？

これが儲けの分ですね。

儲かった 120 万円は、あなたからの出資金 1,000 万円に加算されることになるのです。



お金の使い途（資金の運用状況）	お金の出所（資金の調達状況）
(銀行預金) 1,700 万円 + 売上代金 (1,450 万円) - 費用合計 (630 万円) = 2,520 万円 (商品) 100 万円 (800-700) ※ 700 万円分は売れました。 (土地・建物) 500 万円 ----- (合計) 3,120 万円	(銀行からの借入金) 2,000 万円 (あなたからの出資金) 1,000 万円 + (一年間の儲け) 120 万円 ※ (新しい出資金) 1,120 万円 = (次の一年のためのもの) ----- (合計) 3,120 万円



※繰り返します。今回のサンプルでは税金を考慮していません。

一緒になりますネ。

ここまでいいですか？

※ こういった具合に、成績表を作成する作業を「決算」といいます。

【 損益計算書 】

決算の時、（普通は）損益計算書を見やすいように作り変えます。
 私たちが目にする決算書の中の損益計算書は、以下のような感じになります。

（連結）損益計算書

（単位：万円）

売上高	1,450
売上原価 （引き算します。▲） （販売する商品を仕入れたり、製品を工場で製造したりする時にかかった費用。 仕入れた材料代なども入ります。 工場で働く人たちの給料なども入ります。）	700
売上総利益 （売上高から売上原価を引き算） （商品やサービスが売れた時に、そのものでいくら儲かったか、という時の利益です。）	750 (1,450－700)
販売費及び一般管理費 （引き算します。▲） （営業マンの人件費やガソリン代などの経費。 会社内の事務部門の人たちの人件費、旅費、水道光熱費、保険料、家賃、広告宣伝費、手紙を出したりした時の切手代＝通信費、その他 等々の経費がここに計上されます。 ※ 事例の場合では 630 万円でしたね。 ※ ただし、銀行からの借入金の利息は、この販売費及び一般管理費には入りません。 銀行からの借入金の利息＝営業外費用 ※ なので、ここの経費は 630 万円－50 万円＝580 万円となります。	580 ※ 銀行からの借入金利息は、営業外費用 （もっと下の欄に記載）となりますので、 630 万円から引いておきます。 630－50＝580
営業利益 （企業本来の活動で儲けた利益） ※ 売上総利益－販売管理費及び・・・＝で算出します。	170 (750－580＝170)

※ ここまでいいですか。

この「営業利益」というのが、企業本来の営業活動でいくら儲かったかというのを表します。

※ さらに、営業活動以外に、入ってきた収入や出ていった費用を足したり、引いたりします。

(単位：万円)	
営業利益	170
営業外収益（足し算します） （企業本来の営業は、雑貨の販売だけど土地をたくさん持っていて、そこを他の人に駐車場として貸している、という時などに、入ってくる収入を営業外収益といいます。） 営業外費用（引き算します） （企業本来の営業に必要な費用ではなくてそれ以外の費用をここに計上します。銀行からの借入金の利息は、ここに記入することになります。） ※ 事例の場合だと、営業外収益はゼロで、営業外費用が 50 万円です。 ※ ただし、試験の時は、この 2 つの項目をまとめて表示する場合があります。	0 50 ※ 営業外収益の代表的なもの。 ・ 受取利息 ・ 受取配当金 ※ 営業外費用の代表的なもの。 ・ 支払利息
※ 注意 営業外収益＋営業外費用を一緒にして ＝営業外損益 というスタイルです。 その場合、合計で（事前に）算出されていますので、事例の場合だと ▲50 万円 という表示になります。	
営業外損益 という形で出題されたら	▲50

経常利益 (普通は＝年 1 回決算) 一年間の企業の活動で 企業本来の営業とそれ以外の損益をすべて計算 して算出した利益(儲け)のこと。	120 (170－50)
特別利益(特殊な事情で例外的に発生した利益) ・・・・加算します。	0
特別損失(特殊事情での損失)・・・引き算。	0
という項目が、ここにきます。 ※ 営業外損益の場合と同じように、 試験問題では 特別利益＋特別損失をまとめて ＝ 特別損益 というスタイルが多いです。 ※ ですので、例えばですが 特別利益が 30 万円 特別損失が 100 万円ならば 特別損益は、▲70 万円 と表示されることにな ります。	※ 特別損益の項目で 代表的なものは 固定資産売却益 です。 (いらなくなった) 土地を売却した場合の 利益です。 (もちろん損もあります) ※もともと 500 万円で買ったのに、400 万円でしか 売れなかったら 100 万円の損ですネ。
当期利益 (一年間の) 最終的な利益です。 ※ ただし、税金を引く前の段階の利益です。	120
法人税及び住民税 (引き算します。) ※ 税金の発生です。 最終的に儲けた利益の中から税金の支払いが 発生します。	(50 万円が税金だとします) 50
当期純利益 (税引き後の純利益)	70 (120－50)

それでは、再度(次のページで)事例の場合をまとめて表示してみます。
 どれが足す項目で、どれが引き算する項目かキッチリと理解してください。

(単位：万円)

売上高	1,450
売上原価	700
売上総利益	750
販売費及び一般管理費	580
営業利益	170
営業外損益	▲50
経常利益	120
特別損益	0
当期利益（税引き前）	120
法人税及び住民税	50
当期純利益（税引き後）	70

大丈夫ですね。

では、応用形として試験問題で出るパターンを練習してみます。

【 損益計算書の出題パターン 】

※ 上記の表の通りには出ません。
いくつかの項目が省略されますので、それを自分で補って数値を算出します。

次ページのような出題パターンとなります。

売上高	1,450
売上原価	700
販売費及び一般管理費	580
営業外損益	▲50
特別損益	0
法人税及び住民税	50

こんな感じです。

自分で、削られた項目を復活させて数値を求めることになります。

左右をみくらべて、右側の表をすぐにはけるようになってください。
頑張ってくださいネ。

売上高	1,450
売上原価	700
販売費及び一般管理費	580
営業外損益	▲50
特別損益	0
法人税及び住民税	50



売上高	1,450
売上原価	700
売上総利益	750
販売費及び一般管理費	580
営業利益	170
営業外損益	▲50
経常利益	120
特別損益	0
当期利益（税引き前）	120
法人税及び住民税	50
当期純利益（税引き後）	70

Ⅱ 企業分析（計算問題）

何のために企業の分析をするか？

あなたが、銀行員なら・・・企業に貸したお金がちゃんと返ってくるかどうか、を判断します。

あなたが外務員としてアドバイスするなら、（投資するのはお客様ですね）

投資するお客様にアドバイスできるかどうかです。

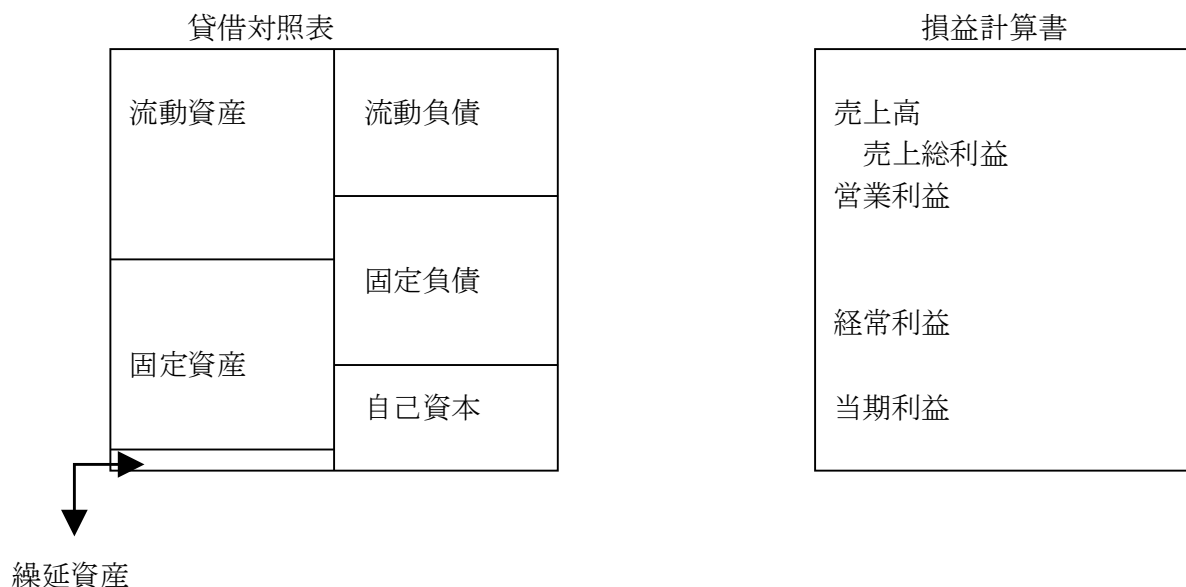
ある会社の株式や社債は（投資する場合には）どうか？

- ・その会社は儲かっているのかどうか。
- ・投資しても安全か？ 倒産することはないか？
- ・効率よく商売をしているかどうか？
- ・成長しているかどうか（将来性はあるか）
- ・・・収益性
- ・・・安全性（流動性）
- ・・・効率性
- ・・・成長性

といったようなことを分析する必要があります。

※ その分析のための数値は、貸借対照表と損益計算等々から算出することになります。

ですから、前章の最後に練習した利益の計算などはキッチリとできるようにしておいてください。



思い出しておきましょう。

【 企業分析のお約束ごと 】・・・重要ですので、キッチリと頭に入れておいてください。

総資本純利益率（ROA） 自己資本利益率（ROE） 総資本経常利益率 総資本純利益率 自己資本経常利益率 自己資本利益率 資本金純利益率 売上高総利益率 売上高営業利益率 売上高経常利益率 売上高純利益率	〇〇利益率 という場合は、左側の項目で右側の項目を割る。 お約束ごと・その① 総資本純利益率 ⇒ 総資本で純利益を割る ということです。 売上高経常利益率なら ⇒ 売上高で経常利益を割る	〇〇で、利益を割る。 利益・・・売上総利益 営業利益 経常利益 当期純利益 ※ 試験の時は、 総資本利益率とか 総資本純利益率とか 「純」が入ったりします。 ※ 左側で右側を割る
流動比率 当座比率 固定比率 固定長期適合率 負債比率 自己資本比率 ※ 左側の単語とは、 流動（資産） 当座（資産） 固定（資産） 負債 自己資本 これらの単語を別の単語 ＝右側、または下の項目 で割る。	〇〇比率（または〇〇率） という場合は、 貸借対照表の左側の項目を右側の項目で割る。 または 貸借対照表の上の項目を下の項目で割る。 以上が お約束事ごと・その② です。 そして、左側の単語を別の単語（もちろん右か、下）で割る。 これが お約束事ごと・その③ です。	流動比率 $= \frac{\text{流動資産（左側）}}{\text{流動負債（右側）}} \times 100$ 当座比率 $= \frac{\text{当座資産（左側）}}{\text{流動負債（右側別単語）}} \times 100$ 固定比率 $= \frac{\text{固定資産（左側）}}{\text{自己資本（右側別単語）}} \times 100$ 負債比率 $= \frac{\text{負債（上）}}{\text{自己資本（下別単語）}} \times 100$ 自己資本比率 $= \frac{\text{自己資本（上）}}{\text{総資本（下）}} \times 100$

総資本回転率 総資本回転期間	回転率と回転期間は、 逆数になる。 お約束事ごと・その④ 回転率×回転期間＝12 ヶ月 (合言葉) 率×期間は、12 だよん。 ※ まずは、これを覚えておきます。	※ では、覚えた基本の式を 変形させます。 期間×率＝12 回転期間×回転率＝12 (上の式の左と右をともに 回転率で割ります) 回転期間＝12÷回転率 (もし、回転期間で割ると) 回転率＝12÷回転期間
総資本 自己資本 資本金	総〇〇＝総資本 自己〇〇＝自己資本 〇〇金＝資本金 資本という単語がきたら お約束事ごと・その⑤ 前期と当期 ＝期首と期末の平均で ※ ただし、例外あり。 貸借対照表の中の数字だけ を使って分析する時は、 平均ではなくて、 その期ごとの数値でOK。 当期の負債を、当期の自己 資本で割る、という時には そのまま当期の数値で割る だけとなる。 (平均値を算出しない)	総資本 ＝期首・期末平均 ＝(期首＋期末) ÷ 2 分子の数値が、当期純利益の ように、損益計算書から持っ てきた数値で、 分母の数値を、貸借対照表か ら持ってくる場合など。 ※ (分子) 損益計算書の数値 ----- (分母) 貸借対照表の数値 こういう場合は、平均で。

以上、5つの約束ごとを頭に入れておいてくださえ、お代官様です。

【 収益性の分析 】

まずは、売上高に対してどうか、どれだけ収益が上がっているか、という分析です。
またまた、例の表で考えてみます。

(単位：万円)

売上高	1,450
売上総利益	750
営業利益	170
経常利益	120
当期利益（税引き前）	120
当期純利益（税引き後）	70

※ お約束ごと・その①・・・左側で割る。

売上高総利益率	売上総利益÷売上高×100	$750 \div 1,450 \times 100$ =51.7%
売上高営業利益率	営業利益÷売上高×100	$170 \div 1,450 \times 100$ =11.7%
売上高経常利益率	経常利益÷売上高×100	$120 \div 1,450 \times 100$ =8.3%
売上高純利益率	当期純利益÷売上高×100	$70 \div 1,450 \times 100$ =4.8%

今度は、同じ収益性を分析する時に、売上高ではなくて、総資本＝総資産で判断するやり方を見ていきます。

※ つまり、企業全体でいくらのお金を投資して、その投資したお金を使ってどれだけの利益（収益）を上げることができたか、という分析です。

※ 注意：これまでのみてきた損益計算書（上の表）では、税金を50万円と設定して最終的な（税引き後）当期利益を70万円として小サンプルを検討してきました。
話を簡単にするために貸借対照表では当期利益を120万円として事例研究をすることにいたします（ご了承ください）。

実際の決算作業では一致します。
簡略化のためですので誤解しないようにお願いします。

(単位：万円)

売上高	1,450
売上総利益	750
営業利益	170
経常利益	120
当期利益（税引き前）	120
当期純利益（税引き後）	70

この数値を使う

120

貸借対照表 (前期末＝(当期の)期首) (単位：万円)		貸借対照表 (当期末) (単位：万円)	
流動資産 (預金 1,700) (商品 800)	流動負債 (短期借入金 2,000)	流動資産 預金 2,520 商品 100	流動負債 2,000
固定資産 (土地 500)	固定負債 0	固定資産 500	固定負債 0
	自己資本 (資本金 1,000)		自己資本＝1,120 (資本金 1,000)
0		0	(利益 120)

合計 (総資産 3,000) (負債・資本 3,000)

(総資産 3,120) (負債・資本 3,120)

※ お約束ごと・その①・・・左側で割る。

総資本純利益率 ＝総資産利益率とも 呼ばれる。 総資本＝総資産	当期純利益÷総資本×100 (総資本＝期首＋期末の平均)	(総資本の平均) (3,000＋3,120) ÷ 2 ＝3,060 70÷3,060×100 ＝2.3%
自己資本純利益率	当期純利益÷自己資本×100 (自己資本＝期首＋期末の平均)	(自己資本の平均) (1,000＋1,120) ÷ 2 ＝1,060 70÷1,060×100 ＝6.6%
※ 自己資本純利益率の高い企業・・・収益力の高い企業		
総資本経常利益率	当期純利益のかわりに経常利益で 分析するものです。 経常利益÷総資本×100 (総資本＝期首＋期末の平均)	(総資本の平均) (3,000＋3,120) ÷ 2 ＝3,060 120÷3,060×100 ＝3.9%
自己資本経常利益率	経常利益÷自己資本×100 (自己資本＝期首＋期末の平均)	(自己資本の平均) (1,000＋1,120) ÷ 2 ＝1,060 120÷1,060×100 ＝11.3%

※ もう一つ、自己資本のかわりに資本金で割るものもあります。

資本金純利益率	※ 注意点 自己資本利益率 が一定の場合 資本金の割合が高い企業ほど、 資本金純利益率は低くなる。 これだけは覚えておいてください。	
----------------	---	--



※ 例題 当期純利益が 70 万円、自己資本が 1, 120 万円の場合で

A社（資本金が 500 万円）		B社（資本金が 1,000 万円）	
自己資本	1,120 万円	自己資本	1,120 万円
資本金が	500 万円	資本金が	1,000 万円
利益部分が	620 万円	利益部分が	120 万円
自己資本利益率が一緒			
$\frac{70 \text{ 万円}}{1,120 \text{ 万円}} \times 100 = 6.3 \%$			
資本金利益率は		資本金利益率は	
$\frac{70 \text{ 万円}}{500 \text{ 万円}} \times 100 = 14.0 \%$		$\frac{70 \text{ 万円}}{1,000 \text{ 万円}} \times 100 = 7.0 \%$	
※ 自己資本利益率が一緒（一定）の場合			
資本金の割合が高い企業ほど（事例ではB社）、資本金利益率は低くなる。			
※ 割り算をする時の、分子（当期純利益）が一緒ですから、 分母が大きくなるほど（＝資本金の割合が高くなるほど）、資本金利益率は 低くなるのは、当然ですね。			

※ 期首と期末の平均は一緒だと考えてください。

※ 覚えられないという方、丸暗記しましょうか。
次ページへどうぞ。

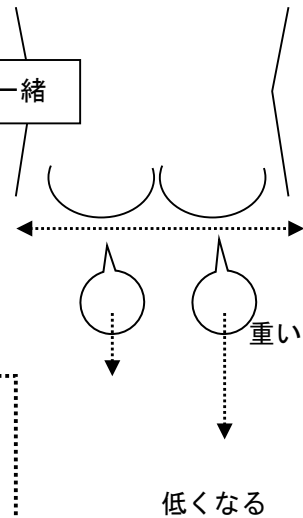
(強引な覚え方) ※ あくまでも理論的に覚えられない方向けです。

下ネタですいません。(苦笑)

(イメージしてくださいネ)

※ 自己**資本利益率**が一緒(一定)の場合
資本金の割合が高い企業ほど、資本金利益率は低くなる。

左右の尻の高さは一緒



重い

低くなる

自分のお尻にお金が入った袋を、左右一つずつぶら下げる。
 お金のたくさん入った袋の側のお尻が、より下に垂れる。
 ⇒ 低くなる。

**自分のお尻が左右一定・・・自己資(し)本利(り)益率が一定の場合(自己のおしり)
 お金の重い方が・・・資本金の(お金の)割合が高い方が(重い方が)
 尻が低く垂れ下がる・・・資(し)本金利(り)益率が低くなる(垂れ下がる)。**

※ お粗末でした。(下ネタ嫌いの方、本当に申し訳ございませんでした。)さて、気分を変えて安全性(流動性)の分析に進みたいと思います。

【 安全性(流動性)の分析 】

貸借対照表
 (前期末＝(当期の)期首) (単位:万円)

流動資産 (預金 1,700) (商品 800)	流動負債 (短期借入金 2,000)
固定資産 (土地 500)	固定負債 0
0	自己資本 (資本金 1,000)



貸借対照表
 (当期末) (単位:万円)

流動資産 預金 2,520 商品 100	流動負債 2,000
固定資産 500	固定負債 0
0	自己資本＝1,120 (資本金 1,000) (利益 120)

合計 (総資産 3,000) (負債・資本 3,000)

(総資産 3,120) (負債・資本 3,120)

※ お約束ごと・その②・・・貸借対照表の左側の項目を右側の項目で割る。

(繰り返します)

※ お約束ごと・その②・・・貸借対照表の左側の項目を右側の項目で割る。

流動比率 一年以内に返さないといけない負債（借金）をどれだけ、一年以内に現金化される資産でまかなえることができるか。	流動資産÷流動負債×100 流動資産・・・左側 流動負債・・・右側	$(2,520+100) \div 2,000 \times 100$ =131%
※ 高いほど良い。理想は200%以上。（合言葉、100%は1流じゃないよ2流だよ） 200%の流動資産 借金が100なのに、返すための資産（左側）が50の企業と 借金が100で、返すための資産（左側）が300の企業。・・・どっちが安全ですか？		
当座比率	当座資産÷流動負債×100 当座資産（左側） ・・・流動資産の中で、すぐに現金化できるもの。 （現金とか預金とか受取手形など） 流動資産 －たな卸し資産－その他の流動資産 ＝当座資産	$(2,520) \div 2,000 \times 100$ =126%
※ 望ましいのは・・・100%以上（望ましい流動比率＝200%以上の半分は欲しい）		
固定比率	固定資産÷自己資本 固定資産（左側） 自己資本（右側） 1年以上にわたって使用される資産＝固定資産が、どれだけ返さなくても良いお金でまかなわれているか。 （借金じゃなくて、自己資本で）	$500 \div 1,120 \times 100$ =44.6% ※ 自己資本の平均ではありません。 ※ 分子も分母も同じ貸借対照表の数値だからでしたネ。
※ 当然、低い方が良い。100%以下。（でも、そんな企業ばかりではありませんネ。）		

固定長期適合率	※ 日本には、固定比率が 100% をオーバーする会社もたくさん存在しています。 そこで、自己資本だけでなく他人資本（長期借入金＝固定負債）も入れて安全性を分析しましょう、というのが「固定長期適合率」です。 固定資産 ----- 自己資本＋少数株主持分＋固定負債 × 100 ※ 少数株主持分・・・ 固定比率では、関係ありませんが固定長期適合率では、固定負債と自己資本の仲間に入れます。	（事例の場合） 固定負債＝0 なので分母は 1,120 です。 $500 \div 1,120 \times 100$ $= 44.6\%$ ※ 自己資本の平均ではありません。 ※ 分子も分母も同じ貸借対照表の数値だからでしたネ。
-----------------------	--	---

※ 固定比率と同様に **100%以下**が望ましい。

※ （少数株主持分＋自己資本＝純資産の場合）

固定長期適合率が 100%の場合は、流動比率も 100%になる。

流動比率が

$$= \frac{\text{流動資産}}{\text{流動負債}} \times 100$$

= 100%ということは

流動資産＝流動比率

流動資産	流動負債
←→ 同じ数値	
固定資産	固定負債
	自己資本 少数株主持分

固定資産＝

固定負債 ＋

自己資本 ＋

少数株主持分

※ おもしろい問題になりますね。

負債比率	負債と自己資本を比べたものです。 負債÷自己資本×100 ※ 低いほど良い。 それだけ安全性が高い。 100%以下。	$2,000 \div 1,120 \times 100$ $=178.6\%$
自己資本比率	※ 全部の資産（総資本）の中で、返す必要のないお金＝自己資本がどれだけの割合か、ということを表すもの。 自己資本÷総資本×100 ※ 総資本＝自己資本＋新株予約権＋少数株主持分＋負債 ※ 高いほど安全性が高い、財務内容が良い、ということになる。	$1,120 \div 3,120 \times 100$ $=35.9\%$
※ 自己資本比率が高い会社・・・不況（売上減）に対しての抵抗力あり、ということになる。		

【 効率性の分析 】

いかに、資金（会社の資本＝資産）が効率良く使われているか、どうかです。

資本（資産）の効率性をみる指標（考え方）	
回転率	回転期間
（例えば） ※ 全資産 1,000 万円を投資した時に、 年間 1 億円の売上有る企業と 年間 500 万円しか売上がない企業 どっちが効率が良いですか？	※ 毎日毎日、製造生産する製品・商品が（1ヶ月分）全部売れるのに、 1ヶ月で売れる会社と 6ヶ月も必要な会社。 どっちが良いと思いますか？

※ お約束ごと・その④とその⑤の世界です。

代表的なものは、「総資本回転率（回/年）」と「総資本回転期間（月）」です。

総資本回転率	総資本回転率 $= \frac{\text{（年間）売上高}}{\text{総資本（期首と期末の平均）}}$ ※ 「率」だけど、×100 しない。 パーセントではない。 ※ 単位は、回/年 である。	$(1,000 + 1,120) \div 2$ $= 1,060 \cdots \text{平均}$ $= 1,450 \div 1,060$ $= 1.37 \text{ 回/年}$
総資本回転期間	総資本回転期間 $= \frac{\text{総資本（期首と期末の平均）}}{\text{（年間）売上高}} \times 12$ ※ 単位は、月 である。 ※ 総資本回転率の式を、分子と分母と入れ替えて12倍するという覚え方もある。	$(1,000 + 1,120) \div 2$ $= 1,060 \cdots \text{平均}$ $= 1,060 \div 1,450 \times 12$ $= 8.8 \text{ 月}$

※ 覚えていますか、お約束ごと・その④と合言葉。

回転率×回転期間＝12 （ 率×期間は 12 だよん ）

$$\begin{array}{c} \text{総資本回転率} \times \text{総資本回転期間} \\ \downarrow \qquad \qquad \qquad \searrow \\ \text{(年間) 売上高} \qquad \qquad \text{総資本(期首と期末の平均)} \\ = \frac{\text{-----}}{\text{総資本(期首と期末の平均)}} \times \frac{\text{-----}}{\text{(年間) 売上高}} \times 12 = 12 \end{array}$$

※ ほんと、そうですね。

※ ここから式を変形すると、いろんな問題のパターンがつかれます。

$$\textcircled{1} \quad \text{総資本回転期間(月)} = \frac{\text{総資本(期首と期末の平均)}}{\text{(年間) 売上高}} \times 12$$

$$\textcircled{2} \quad = \frac{\text{総資本(期首と期末の平均)}}{\text{(年間) 売上高} \div 12}$$

$$\textcircled{3} \quad \text{総資本回転期間(月)} = 12 \div \text{総資本回転率(回/年)}$$

$$\textcircled{4} \quad \text{総資本回転率(回/年)} = 12 \div \text{総資本回転期間(月)}$$

(合言葉) 12 を割れば反対登場。(12 を回転率で割れば、回転期間が算出される。)
(12 を回転期間で割れば、回転率が算出される。)

※ 重要(この効率性と収益力を表す利益率との関係を問う問題もあります。)

※ 左の式を、分解すると右側の二つの指標に変形できますよね。

$$\begin{array}{c} \frac{\text{当期純利益}}{\text{総資本}} = \frac{\text{当期純利益}}{\text{売上高}} \times \frac{\text{売上高}}{\text{総資本}} = \frac{\bullet}{\cancel{\star}} \times \frac{\cancel{\star}}{\blacksquare} \\ \downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \downarrow \\ \text{総資本利益率} = \text{売上高純利益率} \times \text{総資本回転率} \end{array}$$

はい、ここから新たな問題がつかれるのです。

※ こんな問題は、いかがですか？

$$\frac{\text{当期純利益}}{\text{総資本}} = \frac{\text{当期純利益}}{\text{売上高}} \times \frac{\text{売上高}}{\text{総資本}}$$

↓ ↓ ↓

$$\text{総資本利益率} = \text{売上高純利益率} \times \text{総資本回転率}$$

問題①

「売上高純利益率が同じ場合、総資本回転率が高いほど、総資本利益率は高くなる。」

○か×か？ 「○」 正解！

「売上高純利益率が同じ場合、総資本回転率が高いほど、総資本利益率は低くなる。」

○か×か？ 「○」 不正解！ 正解は「×」

問題②

「売上高純利益率が一定の場合、総資本回転率を高めると、総資本利益率は上昇する。」

○か×か？ 「○」 正解！

もうバッチリですね。

【 成長性の分析 】

※ これは簡単ですね。

前の期と、次の期（当期）とを比較して、どのくらい伸びているか（成長しているか）です。

（単位：万円）

	前期	当期
売上高	900	1,450
当期利益	35	50

まずは、売上高成長率と利益成長率です。

※ 上の表のと通りの成績だったと仮定して、練習してみます。

（これまでの小サンプルとは数値が異なります。）

$$\text{売上高成長率} = \frac{\text{当期売上高}}{\text{前期売上高}} \times 100 = \frac{1,450}{900} \times 100 = 161.1\%$$

$$\text{利益成長率} = \frac{\text{当期利益}}{\text{前期利益}} \times 100 = \frac{50}{35} \times 100 = 142.9\%$$

これとは別に、伸び率（増収率・増益率）という分析もあります。
こちらの方が、一般的かも知れませんネ。

$$\begin{aligned} \text{売上高伸び率} &= \frac{\text{当期売上高} - \text{前期売上高}}{\text{前期売上高}} \times 100 = \frac{1,450 - 900}{900} \times 100 \\ \text{(増収率)} & \\ &= 61.1\% \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{利益伸び率} &= \frac{\text{当期利益} - \text{前期利益}}{\text{前期利益}} \times 100 = \frac{50 - 35}{35} \times 100 \\ \text{(増益率)} & \\ &= 42.9\% \end{aligned}$$

※ もちろん、増益率は、経常利益でも算出できます。

ここまで、収益性と安全性（流動性）と効率性（資本効率）と成長性についてみてきました。
あと少しです。頑張りましょう。

次は、キャッシュフロー分析と損益分岐点分析についてです。
その前に、ここまでの復習をしておきます。
覚えておいても損はしないと思います。

【 企業分析のまとめ（便利な覚え方） 】

これまで見てきた各種の企業分析の比率を一覧にしてみます。
気づくことがあります。

(収益性) 売上高総利益率	高いほど良い。
(収益性) 売上高営業利益率	高いほど良い。
(収益性) 売上高経常利益率	高いほど良い。
(収益性) 売上高純利益率	高いほど良い。
(収益性) 総資本純利益率	高いほど良い。
(収益性) 自己資本利益率	高いほど良い。
(収益性) 総資本経常利益率	高いほど良い。
(収益性) 自己資本経常利益率	高いほど良い。
(安全性) 流動比率	高いほど良い。できれば 200%以上 。
(安全性) 当座比率	高いほど良い。できれば 100%以上 。
(安全性) 固定比率	低いほど良い 。できれば 100%以下 。
(安全性) 固定長期適合率	低いほど良い 。できれば 100%以下 。
(安全性) 負債比率	低いほど良い 。できれば 100%以下 。
(安全性) 自己資本比率	高いほど良い。
(効率性) 総資本回転率	高いほど良い。
(効率性) 総資本回転期間	(上の逆数なので、 短いほど良い 。)
(成長性) 売上高成長率	高いほど良い。
(成長性) 利益成長率	高いほど良い。
(成長性) 売上高伸び率	高いほど良い。
(成長性) 利益伸び率	高いほど良い。
(キャッシュフロー分析) 営業キャッシュ・フロー有利子負債比率	高いほど良い (安心) 。 ・・・次ページ参照

※ **固定比率**と**固定長期適合率**と**負債比率**だけが、低い（100%以下）ほど良いのです。

(合言葉は) **コ** **チョウ** (ラン) と **借金** 。

固定比率	固定長期適合率	負債比率
↓	↓	↓
コ	チョウ (ラン)	と 借金

Ⅲ キャッシュフロー分析と損益分岐点分析

【 キャッシュフロー分析 】

- ※ 売上が1億円あっても、「売掛金=つけ」であれば、回収されるまで（現金化されるまで）お金は1円もないことと一緒です。

これでは「キャッシュがある」、とは言えません。

つまり、キャッシュ（現金）ベースで、どのくらいの能力があるか・用意されているか、という分析が、**キャッシュフロー分析**というものです。

- ※ 決め打ちしてください。（前ページの企業分析のまとめの一覧表の最下部のとおりです）
キャッシュフローの分析において

〇〇キャッシュ・フロー比率 とか

〇〇キャッシュ・フロー〇△比率 という場合には、**必ず比率が高いほど、良い（安心）と判断**して構いません。

- ※ 代表的なものを一つだけ。

$$\begin{array}{c} \text{営業活動におけるキャッシュ・フロー} \\ \text{営業キャッシュ・フロー} = \frac{\text{-----}}{\text{有利子負債の残高}} \times 100 \\ \text{有利子負債比率} \end{array}$$

↑↓
(社債やCP=コマーシャル・ペーパーも含まれる)

これは、負債に対しての支払能力をみるものです。

- ※ （突然ですが）問題です。

「営業キャッシュ・フロー有利子負債比率は、高ければ高いほど良い」○か×か？

「○」・・・「正解！」

「営業キャッシュ・フロー有利子負債比率は、高ければ高いほど、負債に対しての支払能力が優れていることになる。」○か×か？

「○」・・・「正解！」

二つとも正解ですか、さすがですね。

【 損益分岐点分析 】

売上高から、売上原価を引いて（売上総利益を算出して）、販売費及び一般管理費を引いて営業利益を出して・・・そして最後に利益がいくら確保できたかをみる手法をやりました。

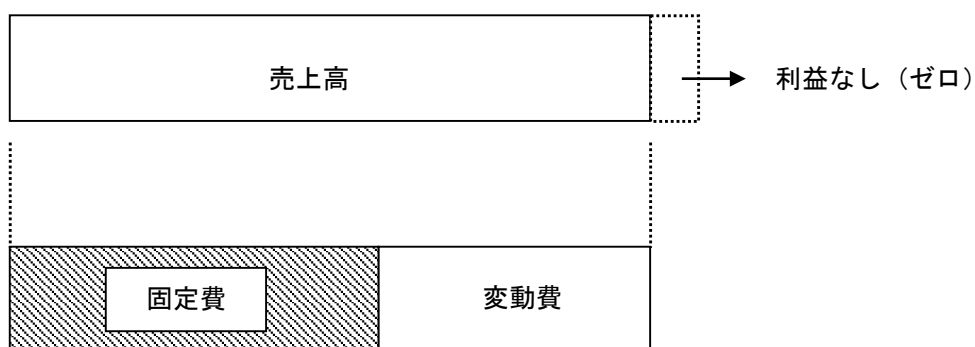
覚えていますか。

※ 今度は、**売上高を、費用（＝固定費と変動費）と利益に分解**する分析の仕方です。

固定費・・・売上がゼロでも、100でも関係なく発生する費用。人件費とか支払利息とか。

変動費・・・売上があがれば、それに比例して発生する費用。原材料費とか販売手数料など。

※ **損益分岐点**・・・売上高と費用（固定費＋変動費）が一緒になる時（利益ゼロ）の売上高。



変動費 2,000 万円

固定費 3,000 万円 だとすると、売上高が 5,000 万円で利益ゼロ。・・・分かりますネ。

この時、もし売上高が落ちこんで（極端な話しとして）2,500 万円となると、変動費を計算しなくても、固定費が 3,000 万円必要なので、赤字になる、というのは理解できますね。

逆に、売上が 5,000 万円から、6,000 万円、7,000 万円と増えていけば、何となく利益がどんどん増えていくだろうね、ということは分かりますネ。

※ もし、下のような計算式があったら？

90%、80%と比率が下がったら・・・？ ① 売上が増えた ② 費用が少なくなった ③ ①と②が同時に発生 のどれかですね。	損益分岐点（利益ゼロ） （＝変動費＋固定費） ----- × 100 売上高 ⇒ 100%だと 利益ゼロ・費用と売上が一緒。	120%、130%と比率が増えたら・・・？ ① 売上が少なくなった ② 費用が増えた ③ ①と②が同時に発生 のどれかですね。
---	--	--

100%を下回ったら 利益が発生！	100%なら 利益ゼロ（費用と売上が一緒）	100%を上回ったら 損失が発生！
---------------------------------	------------------------------	---------------------------------

（合言葉は）**損益分岐（シュッシュポッポ）は、左（100%より小）がお得。**

はい、この公式のことを

※ **損益分岐点 ÷ 売上高 × 100 = 損益分岐点比率（%）**

 といいます。

違いをキッチリとマスターする！

※ では、他にも試験に出そうな語句の説明に入ります。

損益分岐点の売上高 （利益ゼロ・ 損益分岐点の話）	売上高－変動費＝固定費 （利益ゼロ・ 損益分岐点の話）	※ 損益分岐点売上高 （利益ゼロ・ 損益分岐点の話）
（損益分岐点の） 売上高＝変動費＋固定費 この式を変形。	（左辺） （右辺） 売上高－変動費＝固定費 ↑ さらに変形。 （左辺だけ下のように変形） 変動費 売上高 $(1 - \frac{\quad}{\quad}) = \text{左辺}$ 売上高 この赤い点線枠の部分で 左辺と右辺の両方を割ると （左辺）売上高＝（右辺）	（重要） （損益分岐点の） 売上高 固定費 ＝ $\frac{\text{-----}}{1 - \text{変動費率}}$ 固定費 ＝ $\frac{\text{-----}}{1 - \frac{\text{変動費}}{\text{売上高}}}$ ↑

※ 式の変形は覚えなくて構いません。

損益分岐点売上高の式だけを覚えてください。

※ (合言葉は)

(損益分岐の) **割り算は、固いお餅を割る**んだよ。

餅米 (もちごめ) を **1 から引いて** (粉にして) 、**変化**させたら「ほらお餅」

固定費 (固いお餅) を割る
1 - 変動費率 (変化)

$$\text{(損益分岐点の) 売上高} = \frac{\text{固定費}}{1 - \text{変動費率}} = \frac{\text{固定費}}{1 - \frac{\text{変動費}}{\text{売上高}}}$$

あと下表のような語句もあります。

限界利益 (利益ゼロは関係なく)	限界利益率	変動費率 (変動費の割合)
(一般的に) 売上高 - 変動費 = 限界利益 といいます。 なので、限界利益 - 固定費が = 利益	限界利益率 = 1 - 変動比率 ※ 時々、試験に出ます。	変動費率 = $\frac{\text{変動費}}{\text{売上高}}$ (%で表すこともある。)

※ 変動**比**率ではないからネ。
変動**費**の率・変動費率ですよ。

※ 最後に損益分岐点比率などを算出する練習問題で終わります。ガンバ！です。

【 損益分岐点分析の計算問題 】

- ※ 変動費 1,800 万円
固定費 3,000 万円 売上高 5,000 万円のA社の ①損益分岐点（の売上高）は？
②損益分岐点比率は？



$$\begin{aligned} \text{① 損益分岐点は} &= \frac{3,000 \text{ 万円 (固定費)}}{1 - \text{変動費率}} = \frac{3,000 \text{ 万円}}{1 - \frac{1,800 \text{ 万円 (変動費)}}{5,000 \text{ 万円 (売上高)}}} \\ &= 4,687.5 \text{ 万円} \end{aligned}$$

$$\text{② 損益分岐点比率は} = \frac{4,687.5 \text{ 万円 (損益分岐点)}}{5,000 \text{ 万円 (売上高)}} \times 100 = 93.75\%$$

ちなみに、③限界利益は？ ④変動費率は？ ⑤限界利益率は？

$$\text{③ 限界利益} = 5,000 \text{ 万円} - 1,800 \text{ 万円} = 3,200 \text{ 万円}$$

$$\text{④ 変動費率} = 1,800 \text{ 万円} \div 5,000 \text{ 万円} = 0.36 \quad (\text{または } 36\%)$$

$$\text{⑤ 限界利益率} = 1 - 0.36 = 0.64 \quad (\text{または } 64\%)$$

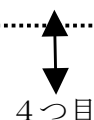
- ※ 最後になりましたが、損益分岐点比率の強引な覚え方をお伝えします。
売上高と損益分岐点のどっちをどっちで割るか、ということです。

（合言葉）損な売り、そんな売り方、止めてよネ。（左に損がきますから）

$$\text{損 (損な) 益分岐点} \div \text{売 (売り) 上高} \times 100 = \text{損益分岐点比率。}$$

- ※ 100%を下回れば、利益発生です。（ということは、例の低いほど良い、が4つになります）
コチョウランと借金だけは低い勝ち。⇒ コチョウラン、借金、**損売り**、低い勝ち。

ここまで本当にお疲れ様でした。
もう少しありますけど。（笑）



4つ目

Ⅳ 配当率と配当性向について

なぜ配当？ 分かりますね。投資家は配当を気にするのです。

皆さんが、もし航空会社の株式を所有していたら「株主招待の航空券」の特典が気になりませんか。それと一緒に。

どれだけ配当をもらえるのか（所有している株式が上がったり下がったりするのと同様に）気になるのです。

【 配当率と配当性向 】

覚えるのは2つだけです。

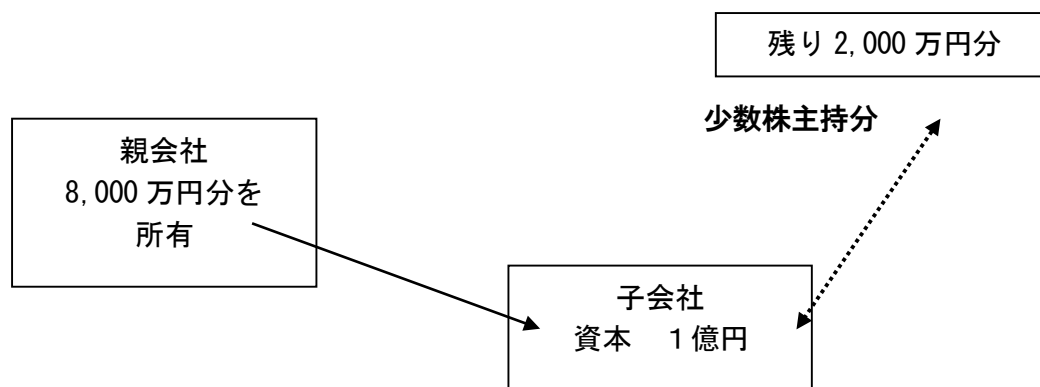
配当率	配当性向
（株主からみて、自分たちが資本金を出資しているの）	（儲けた）当期純利益の中から、どれだけが配当に向けられているか。
資本金に対して、どれだけの配当が支払われているか、を分析。	当期純利益に対しての配当金の割合。
$\text{配当率} = \frac{\text{配当金（一年間）}}{\text{資本金（期中の平均）}} \times 100$	$\text{配当性向} = \frac{\text{配当金（一年間）}}{\text{当期純利益}} \times 100$
分母を「当期純利益」に入れ替えるだけ	
	または、1株当たりで算出しても可。 $\text{配当性向} = \frac{\text{1株当たり配当金（一年間）}}{\text{1株当たりの当期純利益}} \times 100$
配当性向の高い会社は？	配当性向の低い会社は？
・株主に利益還元（内部留保が少なくなる） ・財務基盤が弱くなる。	・株主還元消極的。 ・内部留保率が高い。（将来の配当期待）

V 財務諸表と企業分析の最後

【 連結財務諸表と親会社・子会社 】

※ 連結財務諸表の作成・・・親会社が他の会社を支配するに至った日に作成。

※ 少数株主持分・・・子会社の資本の中で、親会社に帰属しない部分。



※ （原則として）親会社は、子会社を連結の対象としなければならない。

ただし、**支配が一時的と認められる会社等**

連結することにより利害関係の判断を著しく誤らせるおそれがある会社は

連結したらダメ。

以上で「財務諸表と企業分析」編を終わります。
本当にお疲れ様でした。

(完)

証券外務員一種・二種合格

合言葉de合格！法

サクセスキューブは証券外務員一種・二種の試験合格を応援するサイトです。

Success3

サクセスキューブ株式会社

Copyright (c) <http://www.success3.jp> All Rights Reserved.

本文書は著作権法によって守られているものです。
無断での転載・利用禁止。